



青木村子どもはつらつネットワーク通信

平成26年度 第113号 2月1日
青木村子どもはつらつネットワーク事務局発行

子育てフォーラム青木2014 分科会

昨年11月29日(土)の子育てフォーラムで行われましたアンケート委員会の報告と4つの分科会の概要をお伝えいたします。



アンケート委員会報告 「あおきっ子の家庭学習はどうしてる？」

(あおきっ子教育ポイント5か条アンケート委員会)

アンケート委員会では村内での家庭教育の実態を把握するために「あおきっ子教育ポイント5か条」の「第4条 決めた時間は必ず学習(園児は元気に外遊び)」についてアンケート調査を行いました。時間の都合上、集計結果の一部だけ報告させていただきます。(平成26年9月に実施。村内保育園児と小学生中学生の保護者395名(約9割)が回答)

第4条 決めた時間は必ず学習(園児は元気に外遊び)

目安	低学年… 20分以上
	中学年… 30分以上
	高学年… 60分以上
	中学生… 120分以上

学習習慣を小さい時から身につけさせたいものです。
半分は宿題、残り半分は自主学習を進めましょう。



- ・園児の外遊びは、平日は20分未満、休日は30～60分が多い。
- ・小学生の学習時間は、平日は、小学校低学年が20～30分、高学年は30～60分が多い。休日は高学年で60分以上の子どもの数が増えている。
- ・中学生の学習時間は、平日は60～120分の生徒が多く、休日は120分以上の生徒が平日より多い。

- ゲーム・テレビ・ネットに費やす時間も調べてみました。園児では平日 30～60 分が多く、休日は 60～120 分が多くなっており、これは外遊びをする時間より多くなっている。
- 小学生がゲーム・テレビ・ネットに費やす時間は、平日は 30～120 分が多く、休日は 60～120 分以上が多く、平日休日共に学習時間より多くなっている。
- 中学生もゲーム・テレビ・ネットに費やす時間は、平日は 30～120 分が多く、休日は 60～120 分以上が多くなっている。
- 「家庭で4条を意識しているか」の問いには、年少年中は「意識していない」、年長から小3までは「意識している」、小4から中学生は「子どもに任せている」という保護者が多い。
- 園児に必要な外遊びの時間については、「子ども任せ」「設定不必要」「わからない」と考えている保護者が多い。
- 小学生に必要な学習時間については目安の時間どおり必要と考えている保護者が多いが、「子ども任せ」「設定不必要」と考えている保護者も一定数いる。特に休日の学習時間に関しては、「設定不必要」と考えている保護者が多い。
- 中学生に必要な学習時間については、120 分以上必要と考えている保護者が多い。しかし「子ども任せ」「設定不必要」「わからない」の回答も一定数ある。
- 学習塾・習い事・通信教育をしている割合（スポーツは含まない）は、園児は 31%、小学生は 55%、中学生は 59%で、頻度は週 1～2 回が多い。始めたきっかけは、一番多いのが「子どもの意思」で2番目が「親の勧め」となっている。
- 宿題をする場所は、小1～中2くらいまでは「家族の部屋（居間など）」が多く、小6から「自分の部屋」でする子が増える。小学校低学年では児童センターや寺子屋などでする子も多い。
- 「宿題や課題の内容を知っているか」の問いには、全体的に「知っている」と回答の保護者が多いが、小6から「知らない」保護者が増えている。
- 宿題の量については「適当」と考える保護者が多い。内容に求めるものについては「学校に任せる」が一番多く、次いで「基礎・基本」、「思考力」と続く。

子育てフォーラム青木 2014

調査期間: 平成26年9月
調査対象: 村内保育園児・小学生・中学生の保護者の皆様

回答数	男子(人)	女子(人)	計(人)
青木保育園	31	40	71
青木小学校	107	112	219
青木中学校	54	51	105
	192	203	395



第1分科会

決めた時間は必ず学習・園児は元気に外遊び

～できるのか？～

(あおきっ子教育ポイント5か条推進委員会)

○保小中それぞれのアンケート結果をもとに発表し、意見交換が行われました。

<保育園>

アンケート結果より、休日の外遊びの時間が30～60分という結果に対して、ゲーム・テレビ・ネットの時間が60～120分という結果が気になった。その結果を受けてお散歩マップを作成、紹介。



<意見交換より>

- お散歩マップを改めて見て、青木にも自然がたくさん遊び場があることに気がついた。
- 午前中、未就児の児童センターの利用は可能。もっと利用してもらえるよう知らせていきたい。しかし、センターに来て、お子さんが遊んでいる間、保護者がスマホをずっと使っていることが気になる。
- 「汚れるからやめなさい」とつい言うってしまう。どろんこになってもっと遊ばせたい。

<小学校>

アンケート結果より、第4条の内容と比べると3年生以上でやや時間が足りていないと言えそうだが、ますます達成できている。また、平日休日共にゲーム・テレビ・ネット等の時間も多傾向が見られた。

<意見交換より>

- 「児童センターで宿題をやってきたら家に帰ってゲームをやってもいいよ」という約束をしている家庭が多い。しかしその内容は、友だちのものを丸写ししたり、友だちにやらせたり…など、少人数ではあるがそういう児童もいる。保護者としては「センターで終わってれば安心」と思うかもしれないが、実際は“どんな汚い字だろうが、どんな方法だろうが良い”というのが気になる。
- センターでの宿題について…できれば茶の間で、おうちの方が見ている前で学習して欲しいと思う。
- 自分の部屋で勉強するように促しても、結局部屋で寝ていたりすることもある。茶の間で集中して学習するために、家族みんなでテレビを消す時間を作ったり工夫していきたい。

<中学校>

- アンケート結果より、他地域と比べると全体的によく家庭学習ができている。休日でも同様によくできている。また青木の場合は比較的、自主的にやろうとする習慣ができている。
- “学習時間120分”この時間を設定することで、学習に目が向いている。良い子どもが育てられている。

<意見交換より>

- 実際、120分は学習できていない。しっかり集中できるのは30分程度。そのため、5教科全て毎日勉強することは難しいので、「3科目ずつ」など親が提案して決めてやり始めている。120分間の内容はその子に合ったやり方を見つけるのは大変。

- 部活をやっている子の方が成績が良い。部活を引退したから伸びる訳ではない。部活の時間がなくなると、ネットやゲームなどその他のことを覚えてしまう。120分と時間が決まっているから良い訳ではなく、生活の仕方が大切。部活で時間がない中で集中して学習すれば学力は上がる。

○世話係の先生よりまとめがありました。

小中学校の学習についてはおうちの方も一緒に見てあげることが大切。学習のやり方を少しアドバイスするだけでかなり変わる。また、児童センターの使い方についても未就児への開放や宿題の取り組み方を考えていく必要がある。



第2分科会

勉強好きになろう！(2年次)

～理科、英語、体育の小中連携の取り組みから～

(小中連携推進委員会)

1 小中連携委員会の活動報告

小学校から中学校への連続性に着目し、小中間で連絡を密に取り合うことによって起こりうる問題を解消していくとともに、中学校進学への不安を軽減するため、次のような活動を行っている。

- (1) 中学校の職員が小学校で6年生に週2時間理科の授業を行う。(通年)
- (2) 6年生が中学校で2学期に体育、3学期に英語の授業を体験する。
- (3) 中学校にて新入生説明会(英語授業体験、中1生による中学校生活・生徒会・部活説明、部活見学)を実施。
- (4) 6年生の中学校文化祭(こまゆみ祭)見学。
- (5) 職員同士の交流。



2 「中学校入学にあたって6年生が心配していること」「中学1年生が実際に入学してから感じたこと」のアンケート結果の報告

- 6年生の半数強が、学習について心配もしくは少し心配している。
 具体的には、勉強の量や宿題の量、定期テスト、新しい教科が増えることについてなど。
 →中1生も入学時は同じような心配を抱えていたが、思ったよりは大丈夫だったとか、先生がしっかり教えてくれるので大丈夫だった、ただし学習内容はだんだん難しくなってきた

たという感想を持っている。

- 他にも、どの部活に入ったらいいか、最後まで続けられるか心配、先輩後輩の上下関係が心配ということが6年生からはあがっている。
→中1生も同様のことを心配していたが、実際は先輩が優しくてよかった、手とり足とり教えてくれてとてもよかったという感想を持っている。

新しい生活には不安はつきものだが、中1生の感想から「案ずるより産むが易し」ということが感じられる。6年生も心配しすぎることなく、希望を持って中学に入学してきてほしい。

3 理科の授業風景（中学校の鷲見先生による「地層のようす」「てこの働き」）と体育の授業風景（中学校の大塚先生による「マット運動」）の視聴と各先生のお話

<6年生の感想より>

- 理科は楽しくてやる気が出る。体育の授業はマナーや姿勢についてもためになった。
- 実際に中学の先生に指導を受けて、中学校での勉強にイメージが持てた。
- 文化祭で初めて中学校に行きました。どんな所か分かってよかったです。
- 文化祭を見てキャンプに行きたいと思いました。
- 中学に入学するのをうきうきして待っている。



4 保護者の方、地域の方との意見交換

- いわゆる「中1ギャップ」を心配されている親御さんもあると思うが、ギャップという言葉に惑わされず、子どもから大人への階段・ステップアップの機会と考えたい。
- 「中学校・中学生は大変」ではなく、大人に近づいていることであり、将来活躍するためのステップアップの機会だと伝えていきたい。
- 敬語が使えるか心配している児童もいるが、中学生と関わる中で、言葉づかいについて、青木の子どもで心配になる子はいない。敬語が使えるということは大人になる心の準備ができていくということ。学校や地域での生活、家庭教育の中でしっかり身につけている。

5 世話役の先生よりまとめ

今後も小学校から中学校へのかけ橋として、6年生の不安を軽減し、希望を持って中学校に入学できるよう、また、起こりうる問題を予防したり解消したりするため、現在行っている活動を吟味し、より連携を充実させていきたい。



第3分科会

共にメリットがある保小の連携

～年長さんにとってはスムーズな就学を、1年生にとっては学習の深化を～
(保小接続プログラム委員会)

☆今年度は、保育園から小学校へのスムーズな移行を目指した従来の取り組みに加え、1年生の育ちにも重点を置き、共にメリットのある接続になるよう活動を始めました。具体的な活動について報告をしました。

年長児の年4回の小学校体験（6月：音楽会、9月：運動会、12月：児童会祭り、1月：1日入学）に加え、1年生が主体となり音楽会・運動会前に交流をしたり、おば



けやしきや外たんけんを行いました。これらの行事前の交流は、小学校は楽しく安心できる場所だと感じ、入学に期待できるよう、また小学校の様子を良く知ってもらえるように行ったものです。年長児は1年生からアドバイスをもらうことで励みになったのはもちろん、お互いに良い刺激になり、心の距離が縮まったように思います。“自立の芽生え”をねらいに置いた1年生の生活科の単元では、子どもたちから自発的に“年長さんと呼ばう”との声があがり、おばけやしき、外たんけんの活動が持たれました。この活動を通して子どもたち同士の関わりから、たくましさ、思いやりの気持ちが大きく育ったことはもちろん、信頼関係や自主性が身に付いたように感じます。また年長児は1年生の姿を見て学ぶことも多く、小学校への期待が膨らんだように思います。

☆前年度、保護者の方より就学への心配事であげられた、和式トイレの使用について、保育園での取り組みを報告しました。また、これらをもとに参加者の方からの感想や意見、情報交換がありました。

- ・保小の取り組みをこれからも続けて欲しい。
- ・子どもたちの力を信じて、自分たちで解決できるような環境設定で自立心を育て、考えられる場を作って欲しい、など貴重なご意見を頂きました。

☆まとめ

これからも小学校就学に向け、子どもたちの育ちや実りのある連携を取っていきたく思います。



1 提案

(1) インクルーシブ教育の概要 (志川小学校長先生より)

インクルーシブ教育システムとは『障がいのある者とない者とが共に学ぶ仕組み』を指す。これは障がいのある子ども教育的制度から排除されず、その個人に必要な「合理的配慮」を受けることが提供されることが特徴的。インクルーシブを進めることはユニバーサルデザインへとつながり、どの子にも有効な教育はすべての子の幸せにつながっている。



(2) 各校でのインクルーシブ教育の取り組み

保育園 (西澤先生より)

- 「わかりやすい環境」をめざし、子どもが動きやすく、生活しやすくするための視覚支援を考えている。そのために時間の流れがわかりやすい時計の模型の使用、トイレ前や部屋の手洗い場前に足形の設置、さらに一日の活動の流れが分かる支援シート(絵カード)の活用を通して、子ども達が生活の見通しを持って生活することができてきている。



小学校 (藤原先生より)

- 全職員で5月に日野市の小中学校を視察→どの教室も視覚による刺激を減らす工夫や黒板の隅に授業の流れを書いておくなど、共通して取り組んでいることが見られた。この視察を受け、青木小でもできることを考え、実践してきた。例えば全ての教室に同じ避難経路図の掲示、教師用棚の目隠し、授業の流れの提示、机の上に置く物の提示などで、視覚刺激を減らし、見通しを持って学習に取り組むようにしている。その子にとっての支援が全体にとってもあるとよい支援につながっていることを実感している。

中学校 (保科先生より)

- その子のできること、好きなこと、得意なことは何かについて客観的、多様な見方で見

ることを意識している。具体的には連絡ノートを用いた職員間での情報交換・共有、一人ひとりに合った課題の用意、教室環境の工夫（物の置き場や学校目標をわかりやすい言葉に置き換える、板書にルビを振る等）、学校と家庭・地域との連携に力を入れている。このようにして、子ども達を多くの目で見、支えている。

2 参加者からの意見・質問・感想など

○インクルーシブ教育の目標は何か

→先生方が子どもの目線に立って考えることができ、教師の専門性を高めることにもつながる。「する支援」からしだいに支援を減らしていき「しなくてもよい支援」にしていくことが目的。最終的に子ども達が考えて動くことができることが大切だと考えている。



○取り組んだことで子どもの学力向上につながるのか

→まだ目に見えてこないが、確実に自分で学ぶ機会が増えている姿がある。この繰り返して、いずれ学力につながっていくと考えている。



○参観日に学校へ行った時、インクルーシブの取り組みが見られた。聞くことが難しい子でも見て集中できる配慮があったり、参観に来た保護者に対する配慮があったりして助かった。保育園で実施している絵カードは、家でも利用してみたい。

3 まとめ（沓掛教育長より）

青木村はインクルーシブ教育に取り組んで2年目にあたる。インクルーシブ教育とは一人の子を大事にする教育を広めていくことで、その子だけのためではなく、全ての子ども達のためになる教育につながる。また、教師の目線で「どうしてあの子は～」でなく、その子がそうせざるを得ない理由を考える見方を先生方が身につけていけたらよいと考えている。

この教育を青木村の誇れる教育にしていきたい。



編集後記

外遊びの時間よりもゲーム・テレビ・ネットの時間が多いというアンケート結果をうけ、第1分科会では保育園で作成したお散歩マップをお配りしました。田沢温泉ほたるの里や太子堂公園のつつじ山など、おすすめポイント満載ですので、ご覧になり、どうぞご家族でお散歩に出掛けてみてはいかがでしょうか。

